

# ロリータ・ファッションのルーツ —1980年代以降のストリートファッションに着目して—

八幡茉莉子・渡辺明日香

## The Roots of Lolita Fashion — Focus on Street Fashion After the 1980s —

*Mariko YAHATA and Asuka WATANABE*

This work bases on the assertion that the roots of Lolita fashion lay in the 1980s and explores how Lolita fashion came onto the scene as well as what sorts of changes it has undergone up until the present day. Analysis began with a visual survey using photographs of street fashion and fashion magazines such as "Olive." This work divides Lolita fashion into stages taking the early 1980s as "Lolita's First Era," the golden age of Lolita in the 1990s as "Lolita's Second Era," and the diversification of Lolita in the 2000s as "Lolita's Third Era." As a result, it was concluded that Romantic fashion and Lolita fashion have many traits in common and that Lolita fashion said to have sprouted in the 1980s sprang from Romantic fashion. The work also concludes that the Lolita fashion of today owes its existence to the flourishing of 1990s street fashion and can be taken as a signal of the intensification of its popularity cycle after the 2000s.

キーワード：ロリータ・ファッション lolita fashion, ストリートファッション street-fashion

### 1. はじめに

ロリータ・ファッションとは、フリルやレースをあしらったドレスなどを身につけた、装飾的な少女らしさを特徴とする装いの総称であるが、2000年代に入り、日本独特の「カワイイ」文化として、国内の若者を魅了するだけでなく、世界からも注目されている。

国内では、2002年にラフォーレ原宿にて開催された「Gothic&Lolita 万博」、2004年の映画「下妻物語」の公開、さらには雑誌「夜想」の手がけるギャラリー「パラボリカ・ビス」で2008年から開催されている「夜想ヴィクトリアン展」、2012年には「新宿スタイルコレクション」

」での、ロリータやゴシック&ロリータ・ファッションのブランドによるファッションショーの開催など、ロリータ・ファッションへの関心の高まりが伺える。

海外でも、ロリータ・ファッションのブランド「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」が2007年2月にフランスのパリ・バステューヌに初の海外出店をしたのち、2009年8月にはアメリカ・サンフランシスコ店をオープンし、「Angelic Pretty」は2010年7月にフランス・パリ店、2010年11月にアメリカ・サンフランシスコ店をオープンするなど、日本のロリータ・ファッション関連のブランドの海外進出が増えている。

こうした状況をふまえて、2010年には、経済産業省にクールジャパン室が設置され、デザイン、アニメ、ファッション、映画などの文化産業の海外進出促進、人材育成等の推進がなされている。

具体的には、2007年フランス・パリで開催された「JAPAN EXPO」に「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」, 「Angelic Pretty」のブランドが参加、2009年には「ポップカルチャー発信使（通称カワイイ大使）」が任命され、ファッション誌「KERA」の読者モデルであった青木美沙子が大使の一人を務め、現地の少女たちに好評を博した。2012年9月には、「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」が中国・大連でのイベント「2012 FACo in Dalian」に参加するなど、世界各国でロリータ・ファッションに関するイベントが開催されている。経産省に続き外務省でも、2012年8月に、海外広報や文化交流を担当する組織を一元化し、日本のアニメやファッションなどの魅力を海外に広める「広報文化外交戦略課」が新設され、官民一体の事業が展開されはじめた。

ロリータ・ファッションへの注目の高まりに比例するように、2000年代以降、ロリータ・ファッションに言及した論考が増えている。異性装とジェンダーについて考察したもの〔水野2004〕、ゴシック・ロリータのドレスコードに焦点をあてたもの〔小野原2005〕、なりたちと歴史、発生した状況と思想を分析したもの〔松浦2007〕、音楽とゴシック・ロリータの関連を指摘したもの〔まえばわ2008〕、文学作品や作者自身がロリータ・ファッションに与える影響を述べたもの〔芝崎2009〕など、ロリータ関連研究の蓄積も進んでいるところである。

そこで本論では、ロリータ・ファッションのルーツは1980年代にある〔水野2007〕〔松浦2007〕〔加藤2010〕という指摘をふまえて、筆者の属する研究室所蔵のストリートファッションの写真資料、ならびに、「Olive」, 「装苑」, 「ゴシック&ロリータバイブル」等のファッ

ション誌の分析により視覚的な検証を行い、ロリータ・ファッションがいつどのような形で登場し、現在までにどのように変容しているのかを整理し、明らかにすることを試みたい。

## Ⅱ. ロリータ・ファッションとは何か

ファッション・ジャンルとしてのロリータ・ファッションが登場した時期には諸説あるものの、その多くは1980年代～1990年代といわれている。「ロリータ」という言葉そのものは、嶽本によれば、1955年に出版されたウラジーミル・ナボコフの小説「ロリータ」に由来しているとされる。「ロリータ」のあらすじは、中年の大学教授が、少年時代に死別した恋人の面影を12歳の少女（愛称ロリータ）に重ね、彼女に近づき籠絡するものの、逆に人生を翻弄されるという話であり、ロリータの衣服や身体の細部描写が実に克明に描かれている点が特徴である。

このロリータという言葉が、ファッション用語として用いられるようになったのは、「ファッション年鑑」(1987)によれば、1986年の新しいファッション用語としてロリータ・ファッションについて次のように紹介されている。「少女のようにかわいらしい幼い感じのファッションに対する総称として用いられる。フリルのたくさんついたブラウス、レースカラーやリボン使いのドレス、花柄のスカートなどを、特に少女でない人が着るときにいう」。

このことから、松浦らの指摘のように、1980年代からファッションとしてのロリータが登場したと推測される。なお、ロリータ・ファッションは、ヨーロッパのバロック、ロココ、ヴィクトリアン時代の華やかなドレス・スタイルへの憧憬にあり、これらの様式とルイス・キャロルの小説「不思議の国のアリス」などの少女趣味的なイメージとが組み合わせられ編成されていったと考えられる。それが何故、1980年代に浮上したのか、本論では当時のストリートファッションや雑誌をもとに考察を進めたい。

2012年現在、ロリータ・ファッションは、ゴ

シック&ロリータ・ファッションと混同されることが少なくないが、雑誌『ゴシック&ロリータバイブル Vol.37』（2010）では、ロリータ・ファッション、ゴシック・ファッション、ゴシック&ロリータ・ファッションに大別し、さらに以下のように細かな分類をして紹介している（この分類の中でも、スタイリング方法などによってさらに細分化がなされている）。

ロリータ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スウィート・ロリータ</li> <li>・クラシカル・ロリータ</li> <li>・デコラティブ・ロリータ</li> <li>・ロリータ&amp;パンクス</li> </ul>
ゴシック	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴシック</li> <li>・ゴシック&amp;パンク</li> <li>・19世紀ヴィクトリアンスタイル</li> </ul>
ゴシック & ロリータ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴシック&amp;ロリータ</li> <li>・エレガント・ゴシック・ロリータ</li> <li>・王子スタイル</li> </ul>

近年、ファッション・ジャンルがより複雑になるにつれ、さらなるロリータのジャンルも増えており、雑誌などの媒体で特集されているスタイルとしては、ギャルとロリータの要素を取り入れたギャルロリ（ギャル+ロリータ）、普段着として提案されている装飾を抑えたカジュロリ（カジュアル+ロリータ）なども登場している。

本論は、1980年代に、ファッション・スタイルとなり得たロリータが、現在のようにさまざまなロリータへと広がりを得たのかの軌跡を、1980年代の前期ロリータを「ロリータ第一期」、1990年代のロリータ全盛期を「ロリータ第二期」、2000年代の多様化するロリータを「ロリータ第三期」に分けて考察を進めることとする。

### Ⅲ. 1980年代・ロリータ第一期

#### 3-1. 1980年代の時代背景

1980年代は世界的に好景気が続き、国内では地価高騰や財テクブーム、円高に支えられたバブル経済に突入した時代であった。この豊かな

時代にファッションの担い手だったのは、1960年前後生まれの新人類であり、その新人類世代が装いを自由に選択できる1980年代に入ると、彼らの感覚的な価値観や消費行動から「感性の時代」が到来したといわれた。

ファッションにおいては、1960年代の既製服化を受けて、1970年代の大量生産による服に変わり、1970年代に台頭してきたマンションメーカーが提案する生産量の少ない個性的なDC（デザイナーズ&キャラクター）ブランドが支持を得るようになった。豊かな景気を背景とし、DCブランドのなかの細分化が進展し、トラッド、ボディ・コンシャス、キャリア・ファッション、お嬢様ファッション、フェミニン・スタイル、ポップ&カジュアルなスタイル、前衛的なモード感覚のスタイルなど、様々なブランドが輩出された時代であった。これらのブランドの販路として、1970年代、1980年代にかけて、「バルコ」、「丸井」、「ラフォーレ原宿」などのファッション・ビルが池袋、渋谷、新宿、原宿などに次々にオープンし、「an-an」や「non-no」、「Olive」などのファッション雑誌がDCブランドのファッションを提案すると、若者たちのファッション熱が高まり、ブランド・ブームが生じたのである。

当時のDCブランドは、感性の時代の若者たちを惹き付けるために、ブランドやデザイナーの個性を全面的に表現したファッションが多く現れた。モノトーン中心の「COMME des GARÇONS」、ヨーロッパのコンチネタルなスタイルを提案した「JUN」と「ROPE」、ロマンティックなカントリー調の「PINK HOUSE」、メルヘンチックでキュートな「MILK」、ポップでスポーティーな「BA-TSU」、スポーツカジュアルの「PERSON'S」など、ブランドのイメージが明確であった。こうしたファッションを支持する若者は、上から下まで同ブランドのアイテムで揃えることを望んだ。ブランドの服を着るという行為に、自らのアイデンティティを求める動きがみられ、ファッションで自己を

表現するということが一般化した時代である。

1980年代の半ばには、ブランド・ブームの広まりとともに、ブランドによるさらなる差別化が求められ、ロリータ・ファッションのルーツとなるような、ロマンティックなイメージのあるブランドの広まりもみられるようになった。具体的には、「PINK HOUSE」、 「PEYTONPLACE」、 「ATSUKI ONISHI」、 「VIVA YOU」、 「ATELIER SAB」、 「MILK」などのブランドが該当し、ブランドの世界観を支持する若者たちが登場したのである。

ちょうどその頃、ストリートにも、ロマンティックなファッションを着用した若者が登場するようになった(図1、図2)。白や淡いピンクなどのフリルのついたブラウス、花柄や水玉プリントのワンピース、ソフトクリームやキャンディーなどのお菓子のアップリケのついたギャザースカートなどのスタイルがみられた。もちろん、見た目も装いも成熟したロマンティックな装いの人たちが多数であったが、なかにはあどけない雰囲気のあるロマンティック・スタイルもみられ、これらがロリータ・ファッションの前段階として1980年代に出現してきた点は注目に値する。

こうした背景には、ファッション年齢の低年齢化がある。ブランド・ブームの進展とともに、DCブランドの主な支持者だった大学生や社会人だけでなく、10代の若者向けに、DCブランドの妹・弟版ブランドが生まれ、廉価版のブランドが登場し、より低年齢の若者がブランド・ファッションを身につけ、ストリートに現れるようになった。こうした結果、ロマンティック・ファッションの一部として、現在のロリータ・ファッションに繋がる装いが現れてきたと考えられる。

### 3-2. DCブランドの登場とロマンティック・ファッション

上述のストリートファッションでの状況を裏付ける言説として、漫画家の三原ミツカズは、

ロマンティック・ファッションとロリータ・ファッションの関連性について、【KEROUAC vol.2】(1998)のインタビューで次のようにコメントしている。

ピンクハウスの花柄でいっぱい、レースでいっぱい、リボンでいっぱいの服がすごい人気に。さらにアツキオーニシの、ギャザーがたくさん入ったスカートや、お人形に着せるような服も大人気に。ほとんどロリータのコスプレ状態だった。

さらに、嶽本野ばらの小説「下妻物語」に登場するロリータ・ファッションをこよなく愛する主人公の竜ヶ崎桃子は【Olive】に登場していた時代の「VIVA YOU」について解説するシーンがある。

VIVA YOU といえれば今は、ガーリー路線に転向し、無難なお洋服を作っていますが、80年代のDCブームの先駆けにいたメゾンです。…その頃のVIVA YOUはロリータチックな要素を持ったお洋服を作っていて、かなり素敵なのです。

また、松浦はロリータ・ファッションのルーツについて、一つは1980年代にピークを迎えたロマンティック・ファッションにルーツをもつ「ロリータ」の流れ、もう一つは「ゴスロリ」こと「ゴシック&ロリータ」につながる流れと、大きな流れが二つあるとしている【松浦2007】。これらロマンティック・ファッションに関する解説から、ロリータ・ファッションのルーツにロマンティック・ファッションが関係していると推測できるだろう。では、ロマンティック・ファッションがいかにロリータ・ファッションのルーツとなったのか、以降で詳しく見ていくことにする。

ロマンティック・ファッションは少女服とも呼ばれており、【ファッション年鑑】(1987)

によれば、少女服について「可愛い少女が着るような、フリルのついたワンピースやピンクの花柄のドレス、リボンやギャザーのたくさん入ったワンピース、レースのカラーやカフスのついたドレスなど、雑誌「オリーブ」が取り上げるようなファッション一般を少女服という。ピンクハウス、ミルク、アツキ・オーニシなどのDC系に代表されるロマンティック・ファッションをいう」と説明されている。

このように、ロマンティック・ファッションを広めた媒体として、影響力が高かったと考えられるものに、1983年～87年頃が最盛期であった雑誌「Olive」(マガジンハウス)がある。「Olive」は同出版社の男性向け雑誌「POPEYE」の姉妹誌として1982年に創刊した。1983年秋には「マガジン・フォー・ロマンティック・ガールズ」というキャッチフレーズのもと、「リセエヌ・ファッション」を提案している。「リセエヌ」とは、フランスの公立学校 (lycee) の女生徒のファッションであるが、「Olive」では、単にこれを模倣するだけではなく、「チープシック」、「自由で遊びに満ちた着こなし」の比喩としての意味で用いられていた。

オリーブ少女にとって主題となるスタイルは「少女っぽさ」である。代表的なスタイルは丸襟、重ね着、ストンとしたローウエストのシルエットだが、そこに「ミスマッチ」、「キツチュ」、「少年っぽい」という要素をミックスしていた。フリルいっぱいのロマンティックなロングスカートに大きなサイズのローファー、ショートパンツにストラップ付のおでこ靴を合わせたミスマッチなスタイリング、ワッペンやバッジ、かわいらしいアクセサリをジャラジャラと付けたキツチュなスタイリング、歌手の小泉今日子やチェッカーズをお手本にし、オーバーサイズの白シャツにくるぶし丈のコットンパンツを合わせた少年っぽいコーディネートなどのスタイリングが提案されていた。

「Olive」では、ロマンティック・ファッションをカントリーなイメージのものと、ポップ

な感覚のものに分けて紹介していた。ロマンティック・カントリーでは「PINK HOUSE」、「STREET ORGAN」などのブランドが代表であり、ヨーロッパの田園をイメージし、女の子の夢をレースやリボン、フリルに託したロマンティックな少女服がスタイリングされていた。例えばロング丈のルーズシルエット、テキスタイルはオフホワイト、茶、ピンク、淡いブルーなどのカラーをベースに水玉柄やチェック柄が用いられた。

他方、ロマンティック・ポップでは「ATSUKI ONISHI」や「VIVA YOU」などのブランドが代表であり、デザインや着こなしに遊び心が加わり、ポップでカラフル、装飾的な少女らしさを演出したものが採り上げられていた。シルエットはフィット&フレア、スリムなどであり、デイベアやトランプの柄、チェリーやストロベリーなどのフルーツ・プリント、ボーダーやチェック・オン・チェックのテキスタイルなどが用いられた。

1982年～1987年頃に爆発的に浸透したDCブランド・ブームと相まって、誌面では多くのDCブランドが紹介された。「Olive」で実際に取り上げられたロマンティックな意匠のブランドには「MILK」、「PINK HOUSE」、「VIVA YOU」、「SUGAR」、「田園詩」、「ATSUKI ONISHI」、「HIROMICHI NAKANO」、「STREET ORGAN」、「MADEMOISELLE NON NON」、「ケス・ケラ？」などがあり、「Olive」により少女らしさのあるロマンティック・ファッションが広められ、これがロリータ・ファッションのルーツとなったと推測される。つまり、1980年代には、「Olive」の提案するロマンティック・ファッションが、ストリートファッションに影響を与え、ロリータ・ファッションの萌芽を育てたと考えられる。

#### IV. 1990年代・ロリータ第二期

##### 4-1. 1990年代の時代背景

1990年代に入ると、湾岸戦争が勃発し、国内

的には55年体制とバブル経済の崩壊、長引く平成不況、1995年のオウム事件や阪神大震災など、社会不安を煽る出来事が続き、混乱期の時代に入った。DCブランドを支持した世代に代って、1980年代末に登場した、渋谷に集う高・大学生の間で多様な着こなしを表現する「渋谷カジ(渋谷カジュアル)」が生まれて以降、1990年代は、ファッションのカジュアル化が進展した。

1990年代の半ばには、インターネットが一般に普及し、ポケベルや携帯電話などの新しいコミュニケーション・ツールの登場によって、情報が加速度的に多様化・多量化した時代でもある。こうしたツールの登場により、若者間での横方向のコミュニケーションが促進されると、ブランドやショップが提案するファッションとは別に、渋谷のギャル、原宿の裏原系やボーイズ・スタイルなど、様々なスタイルが同時に展開されるようになり、街を舞台としたストリートファッションが広まりをみせた。

同時に、流行のファッションを目指すのではなく、ファッションによる自己表現や仲間とのコミュニケーションを試みる若者が登場した。レースやフリルをふんだんに使ったドレスなどを着たロリータ、蛍光色やビニル素材のボディスなどを着た近未来的なサイバー、チープで装飾的なデコラなどが登場するようになった。1980年代がブランドの細分化だったとすれば、1990年代には、ストリートにおけるファッションの細分化が広まっていったのである。

こうして街とファッションのポテンシャルが上がると、街頭の若者のスナップを編集の中心に据えた雑誌が登場するようになり、【CUTiE】(1989年創刊)、【Zipper】(1993年創刊)、【FRUITS】(1996年創刊)などのストリート系雑誌の創刊が相次いだ。ストリート系ファッション誌の大きな特徴は、従来のファッション雑誌が扱ってきた、ブランドの衣服をプロのスタイリストがコーディネートし、均整のとれた美しいモデルが着用するという誌面と異なり、自分が選んで工夫を凝らして装い、自ら

がモデルをつとめるという思い思いのファッションにあった。ブランドの世界観を提案した1980年代の雑誌に代って、読者と等身大の街の若者たちによるファッションが提案され、ブランドのお仕着せでない、着用者のオリジナリティーをどう発揮するかに力点がおかれるストリートファッションに注目が集まったのである。

1990年代には、ファッションのストリート化、カジュアル化と並んで、デコラ(デコラティブ)と呼ばれたチープで装飾的なファッションを好む若者が登場した。これは、少女っぽさを強調した装飾過剰なストリート・スタイルのことであり、ピンクのフリル付きブラウスに、レースのベチコートつき水玉バルーンスカート、脚絆のような足カバー、蛍光色に染めた髪、プラスチック製のチープなアクセサリなど、少女趣味でキッチュに飾り立てるのが特徴的な装いである。こうしたスタイルが雑誌【FRUITS】や【KERA】に採り上げられると、装飾的なファッションに対する抵抗力が薄れ、原宿を中心に、若者たちのファッションに装飾過剰なものが散見されるようになった(図5、図6)。

これらの動きに併せて、1994年頃のインディーズ・ブランドの人気や、1997年頃の「beauty:beast」,「20471120」,「Candy Stripper」などの若手日本人デザイナーの活躍や、「BETTY'S BLUE」,「SUPER LOVERS」などのポップでキッチュな雰囲気ブランドが登場し、若者ファッションのボトムアップが着実に進展した。こうした土壌の中から、ロリータ・ファッションも生まれていったと考えられる(図7、図8)。

1990年代には、アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」(1995年)の大ヒットによりコスプレ(コスチューム・プレイ)が一般化し、1990年代後半には、コミケ(コミック・マーケット)から広まったコスプレ・ファッションが、原宿や秋葉原を中心とした街にも広まるようになった。憧れのミュージシャンやマンガの登場人物のスタイルをそのまま模倣した、ゴシック&ロ

リータ系のファッションをした女の子たちが原宿の参宮橋付近で多数集まり、お互いのファッションを称賛したり、萌え系といわれるマンガのキャラクターと同じようなメイド服を身につけ、秋葉原のメイドカフェでアルバイトをする女性が登場するなど、非日常的な衣服を着る行為が広まった時代でもあった。

ロリータとゴシック&ロリータ、メイドは決して同類のファッションではないが、着用者の増加とともに、境界の曖昧なファッションも散見されるようになった。真のロリータ・ファッションの支持者からすれば望まない状況ではあったであろうが、ロリータ・ファッションの知名度や興味関心は、1990年代の後半頃から確実に高まったのである。

ロリータ・ファッションは、今では、流行とは無縁のファッション・ジャンルとして独自の発展を遂げているが、そのルーツは1980年代のロマンティック・ファッションからの派生であり、より少女的な雰囲気と装飾性を強調する形で1990年代に広まりをみせる。このロリータ・ファッションを登場可能なものにしたのは、1990年代のストリートファッションの発展によるものと考えることができる。1980年代には、ブランドや雑誌がファッションを指南する立場であったが、1990年代には、ストリートを起点とした、ファッションを享受する側のイニシアチブが高まり、ファッション雑誌やブランドやマンガ、インディーズ音楽などのさまざまな文化と併存する形で進展がみられたのである。

#### 4-2. ロリータ・ファッションとロマンティック・ファッションの関連性

松浦によれば、1990年代初頭のロリータ・ファッションは、綿の小さめのキャミソールや大きな柄の入ったコットンレースをあしらったもの、子ども服に多用されるような鮮やかなパステルカラーを使い「子ども服のようなデザインを十代後半以上の女性が着る」というスタイルが多かったと指摘している。また、現在に

続くロリータ・ファッションのスタイルが固まったのは1994年ごろとしており、ロリータ・ファッションの条件を次のように述べている[松浦 2007]。

- ①少女性を主張・強調するようなデザイン（レース、リボン、フリルなどのモチーフを多用する）
- ②レーシング（編み上げ）やスカートのなかにパニエを入れて膨らみを作るなど、前近代のヨーロッパのデザインを取り入れたもの（機能は完全に同じとはいえない）
- ③大人サイズではあるが、スタイル全体のイメージが十代の少女の印象にまとまるもの  
松浦は上記のほかに、ロリータのイメージとして華やかなドレスを身に纏うお嬢様、というイメージも挙げている。

ロリータ・ファッションの代表的なスタイルといえば、ワンピースやジャンパースカートをフリルとレースがたっぷりとしらわれたブラウスに重ね、オーバーニーソックスやハイソックス、おでこ靴を合わせたスタイルである。主に、ワンピースやジャンパースカートは身頃部分にプリンセスラインがとられてフィット感があり、スカート部分はギャザーやタックをとっており、さらに下穿きを穿くため、ふんわりと広がり、フィット&フレアのシルエットとなる。

ここで、1980年代のロマンティック・ファッションの一部が、1990年代にロリータ・ファッションに接続するためには、両者にデザインやイメージの共通性が存在することが不可欠である。1980年代のロマンティック・ファッションが、1990年代にロリータ・ファッションになるにあたって、どのような関連性があるのか、具体的に列挙してみる。

##### 1) ファッションブランドのイメージ・コンセプト

ロマンティック・ファッションとロリータ・ファッションの共通点として、まず少女性を主題としている点を挙げるができる。ロマンティック・ファッションブランドとロリータ・

ファッションブランドでは、ブランドイメージやコンセプトとして少女を挙げているブランドが多い。例として、ロマンティック・ファッションのブランドである「PINK HOUSE」と「MILK」、ロリータ・ファッションのブランドである「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」と「Angelic Pretty」、4つのブランドのイメージ、コンセプトを記載する。

#### 「PINK HOUSE」

花模様の少女たちが夢の中で手招いていた。…スワン家のお茶の時間も、スカーレットの舞踏会も、遠い昔の、実在しなかったことなのだから…とわかっていて、だからなおさら、少女たちの碧い瞳に魅せられた。

#### 「MILK」

少女と大人が混在するガーリーでロマンティックなアイテムは、かわいいだけではおさまりきれない、ちょっぴり刺激的なテイストが入っているのが魅力。そんな遊び心がいっぱいレースやフリルをあしらった定番アイテムや、ピュアでハッピーなイメージのプリントものなど、毎シーズン女の子のハートを夢中にさせてしまうカワイイものを提案。

#### 「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」

幼い頃、フリルやレースのついた服を着て、お姫様になったような気分で「かわいい」「きれい」と素直に喜べた。そんな心を持ったロリータ少女の服。

#### 「Angelic Pretty」

小さな頃に憧れた、絵本の中のお姫様が着ていた様な、レースやフリル、リボンがたくさんあしらわれた、とっても可愛いお洋服です。女の子にはいつまでも、夢見る心を持って欲しい…。夢見る心を忘れずに、いつまでも可愛くありたい女の子達の為のブランドです。

#### 2) ブランドの継承

ロマンティック・ファッションブランドから独立したロリータ・ファッションブランド

がいくつかある。「MILK」からは柳川れいによる「Shirley Temple」と村野めぐみによる「Jane Marple」が設立され、「ATSUKI ONISHI」から独立した磯部明徳は「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」を設立している。また、磯部は、雑誌「ゴシック&ロリータアンサンブル Vol.1」(2010)のインタビューで「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」の代名詞ともいわれているオリジナルプリントの誕生について「ATSUKI ONISHIやPINK HOUSEなどが出してみたいいな、ああいう華やかなものがないなあと感じていたんです」と話しており、ロマンティック・ファッションブランドからインスピレーションを得ていることが分かる。

#### 3) プリント生地にもられるデザインの特徴

ロリータ・ファッションブランドでは、オリジナルプリントと呼ばれるプリント生地のアイテムに特徴がある。チェック、ドット、ストライプ柄といった定番柄に加え、花、フルーツ、スイーツ、天使、コスメ、童話、動物など、ロマンティックでメルヘンなモチーフが用いられる。

このルーツと考えられるロマンティック・ファッションのブランドでもプリント柄は多用されており、「PINK HOUSE」では、花柄やチェリー、ネコ、リボンのプリント、「ATSUKI ONISHI」では不思議の国のアリスやテディベア、チューリップのプリントなどが使用されていた。「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」の磯部明徳がロマンティック・ファッションブランドのプリント生地からインスピレーションを得ている点も含め、ロマンティック・ファッションのプリント柄はロリータ・ファッションに大きな影響を与えていることが分かる。

#### 4) スタイリング

スタイリングについても共通点を挙げる事ができる。1つは、スカートに下穿きを合わせるスタイリングである。ギャザーやタックがたっぷりとりられたロリータ・ファッションのジャンパースカートやワンピースでは、スカー



トの膨らみを強調させるため、下穿きを重ねている。まず穿くのがブルマーやドロワーズである。短い丈のものをブルマー、ブルマーより長い丈のものをドロワーズという。裾にレースがあしらわれたものがロリータ・ファッションでは一般的であり、スカート裾からドロワーズのレースを見せることもある。次に、スカートを膨らませる為のパニエを重ねる。パニエはスカートの広がり方にあわせて何枚か重ねる。裾にレースがあしらわれたパニエはドロワーズと同様、コーディネートによっては重ねたスカートの裾から見せる。

ロマンティック・ファッションでも、ドロワーズやパニエを合わせたスタイリングがなされていた。雑誌『Olive』ではドロワーズやパニエを合わせたスタイリングを特集しているの、具体的にみていくことにする。

1986年1月83号では「友達より先に、おめかし思いっきり!」というタイトルでパーティやイベント向けのロマンティック・ファッションを提案している。この特集では、フリルやレースたっぷりのブラウスにギャザーやタックを加えたロングスカートをあわせ、スカートはパニエで膨らませている。

1986年2月84号では「STREET ORGAN」がエプロンドレスをドロワーズと合わせ、ドロワーズを裾からのぞかせたロマンティック・カントリースタイルを提案している。

1987年2月108号(図3)では、「わたしのパニエに春の夢つつんで」というタイトルで、スタンダードなパニエを穿いてスカートを膨らませたスタイルや、パニエの裾をスカート裾から見せた重ね着風スタイル、バツルの形のパニエを穿いてシルエットに動きをつけたスタイルなど、パニエの種類によるスタイリングの提案をしている。ウエストを絞り、スカートはパニエで膨らませてフィット&フレアのシルエットを作っている点と、フリルやレースをたっぷり使っている点など、アイテムの組み合わせ方から、ロリータ・ファッションに近いスタイリ

ングであった。

コーディネートにエプロンを取り入れるスタイルもロリータ・ファッションの代表的なスタイルであった(ここ数年はメイドカフェの流行と共に、ロリータ・ファッションとメイドが混同されることを避けるため、ほとんどなくなってしまったが)。このスタイルは、もともとロマンティック・ファッションで用いられており、『Olive』1986年2月84号(図4)では、「STREET ORGAN」がエプロンドレスとドロワーズを合わせたロマンティック・カントリースタイルを、1986年5月90号では「SUGAR」がチュール素材の黒のスカートとブラウスのセットアップに白のフリルが付いたエプロンを加えた、ロリータ・ファッションに極めて近いスタイリングを提案していた。

これらのスタイリングは、実際に同時期のストリートでも多く用いられ、ドロワーズやパニエのレースをスカート裾からのぞかせるスタイリングや、エプロンをコーディネートに取り入れたファッションが10代後半から20代前半の女性に見受けられた。

#### 4-3. 音楽とロリータ・ファッションの関係

##### ナゴムギャルとロリータ・ファッション

先に述べたように、90年代中盤までに、すでにロリータ・ファッションにはいくつか種類が存在した。なかでも1990年代初頭のロリータ・ファッションにナゴムギャルのスタイルがある。ナゴムギャルとは、ケラリーノ・サンドロヴィッチが主宰する「ナゴムレコード」のバンドを追いかけるファンのことである。所属バンドは「有頂天」、「筋肉少女帯」、「人生(電気グルーヴの前身)」、「ばちかぶり」等である。「有頂天」や「筋肉少女帯」はテクノやロック、パンクなどをベースとした衣装とパフォーマンスで「かっこいいロッカー」というイメージがあるが、その一方で、「人生」や「ばちかぶり」といったバンドは白塗りのピエロの様なメイク、ドラえもんのコスプレ、西洋甲冑を身につける

など、衣装もパフォーマンスも大変奇抜であった。その奇抜な衣装とパフォーマンスに呼応したのがナゴムギャルである。

ナゴムギャルは1970年代後半に台頭した「ニューウェイブ」というロンドンを中心に発生した退廃的、前衛的でマイナーな音楽ジャンルを好んだトンガリキッズから発生したとされている。トンガリキッズは他人と違うことと、マイナーであることに存在理由を見出していた。「MILK」, 「COMME des GARÇONS」, ロンドンファッションの直輸入店、「文化屋雑貨店」といったショップを好み、トンガリキッズに人気のあったバンドの「プラスチックス」, 「ヒカシュー」, 「P-モデル」といったアーティストの姿を参考にして、様々なファッションが生み出されていった。

トンガリキッズはニューウェイブがメジャー化してくる80年代中盤に姿を消したが、トンガリキッズたちのマイナーを好む価値観はナゴムギャルへ継承される。ナゴムギャルは「PINKHOUSE」, 「MILK」, 「Jane Marple」を好んでいたが、ナゴムギャルもトンガリキッズと同じくマイナーであることに存在理由を見出していたため、ブランドのイメージそのものではなく、バンドメンバーの奇抜な衣装に呼応したファッションにアレンジされたものが多かった。従って、コーディネートはロマンティック・ファッションとは異なり、チャイニーズ風の両サイドに分けた三つ編みもしくはお団子を結び、ミニスカートにハイソックスという、キッチュでより子どもっぽいデザインが好まれた。やがて、1986年～1991年のインディーズ音楽やバンドブームの広まりとともに、クラブやライブのファッションとしてナゴムギャルをはじめとするロリータ・ファッションが、イベントに参加するファッションとして半ば定着していくと、こうしたバンドの追っかけはバンギャ（バンドギャル）と呼ばれ、音楽とのつながりも相まって、ロリータ・ファッションが徐々に広がっていったのである。

#### 4-4. ゴシック&ロリータ・ファッションの誕生

ゴシック&ロリータとは、ゴスカルチャーとロリータ・ファッションが融合したファッションであり、黒を基調とした、退廃的なスタイルである。ゴスは、1980年代にイギリス・ロンドンで生まれた「ネオ・ゴシック」という音楽ジャンルに由来している。代表的なミュージシャンは「バウハウス」, 「ジョイ・ディヴィジョン」, 「キューア」, 「スージー&ザ・バンシーズ」などである。ネオ・ゴシックのバンドは一律に、白塗りにブラックメイクをほどこし、強迫的なサウンドで暗黒の世界を表現した。日本では1980年代後半にトランスギャルにより広められた。トランスギャルとは、「YBO2」, 「ZOA」, 「ASYLUM」等が所属する「トランスレコード」のバンドを追いかけるファンのことである。黒服に赤いルージュを引き、不健康そうなメイクが特徴であった。

ゴシック&ロリータのルーツも多様にあるとされるが、ビジュアル系バンドのブームが大きく関わっていることは確かである。ビジュアル系バンドとは、80年代から徐々に広がったロックバンドの一種であり、「X」に始まったとされる。黒くきらびやかな衣装を纏い、宝塚やドラッグクイーンを彷彿させるメイクを施すといった外見が極めて装飾的なことが特徴である。代表的なバンドは「X」, 「GLAY」, 「L'Arc~en~Ciel」, 「黒夢」, 「LUNA SEA」, 「SHAZNA」, 「PENICILLIN」, 「MALICE MIZER」などである。

「MALICE MIZER」はそれまでのビジュアル系のなかでもより装飾的なメイクと衣装をもちいてパフォーマンスをした。ギターのManaは男性であるが、女性的なキャラクターに扮し、ゴシック&ロリータの要素を含む衣装で華やかなパフォーマンスを行なった。こうして彼のスタイルは「エレガントゴシック&ロリータ」と呼ばれ、「ゴシック&ロリータ」のルーツの1つとなった。Manaはファッションブランドも手掛けており、EGL（エレガント・ゴシック・

ロリータ) をテーマに1999年に「Moi-meme-Moitie」のプロデュースに関わった。

かくして、1990年代後半から2000年代にかけて、ストリートでも全身黒のコスチュームに黒のアイシャドー、赤い口紅、首や腕に包帯をぐるぐる巻きにし、不健康なイメージのスタイルが登場するなど、ゴシック&ロリータの装いが見られるようになった。こうしたなか、2000年には、雑誌「ゴシック&ロリータバイブル」が創刊された。音楽カルチャー発信のファッションは、ストリートを経由して、雑誌メディアの潮上となり、ゴシック&ロリータ・ファッション、ロリータ・ファッションブランドの関連ショップや型紙、ビジュアル系バンドが紹介され、ゴシック&ロリータ、ひいては、ロリータカルチャー全般がこの雑誌により浸透し、さらなる広まりをみせたのである。

## V. 2000年代・ロリータ第三期

### 5-1. 2000年代の時代背景とファッション

2000年代初頭は、不況ムードが続きながら、地価の値下がりや銀行、企業の社屋撤退を契機として、海外ブランドの路面店が相次いで出店したことで、ブランド・ブームが浮上した。伝統的で上質な海外ブランドの影響から、神戸エレガンス系や名古屋嬢と呼ばれたエレガンス・スタイルや、お姉系、コンサバ・ギャルなどが登場した。

ブランド・ブームは一般の若者たちの間にも広まったが、80年代のDCブランド・ブームのような全身ブランドで固めるといった装いではなく、Tシャツにジーンズにブランドの小物を合わせるようなカジュアルな装いをグレードアップさせる着こなしが注目された。また、80年代ファッションがリバイバルし、ボディ・コンシャスなワンピースや黒を基調としたモード系のファッション、パンクファッションなど、強くてアヴァンギャルドな装いも登場した。他方では、綿のチュニックやゆったりしたワンピースなどを着たナチュラル系スタイルや、エ

コバックへの関心、オーガニックコットンのアイテムなど、環境を配慮したエコ・ファッションがひとつの流行として享受された時代でもあった。

1990年代に登場したインターネットは、2000年代に入り、ファッションの伝達により大きな影響を及ぼすようになった。SNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)の一つであるmixiのコミュニティから発祥したといわれる山ガールを筆頭に、ホームページやブログなどで情報が瞬時に伝達できるようになり、ファッションの波及は、テレビや雑誌よりはるかに加速されることになった。

SNSが雑誌をはじめとする従来のファッション媒体と大きく異なるのは、誰もが発信者になれる点である。また、ブログやツイッターでは、さまざまな反応がダイレクトに返ってくる。おしゃれをして発信する喜びを感じると共に、閲覧者のリアクションを楽しむことができる。それは、街頭で他人のまなごしを投げかけられる行為に等しく、さらに街頭では出会えない世界中の人たちと関わることもでき、同じファッションの嗜好をより広く、深く享受できる楽しみを味わうこともできる。ブログでファッションを公開し、誰でもファッションを伝える側に立てたことで、人並みの流行よりも、好きなファッションや個性的な装いをアピールする流れが生まれていった。こうして、90年代にはストリートから新しいファッションが生まれたが、2000年代には、インターネット空間から、新しいファッションが生まれるようになったのである。

ロリータ・ファッション関連でも、ロリータ・モデルの青木美沙子や深澤翠のブログでの私服コーディネート紹介や、お茶会などのイベント企画の案内などが広がっている。また、モバゲーでのロリータ・サークルをはじめ、2ちゃんねるでのセールや福袋等の情報交換、Yahoo!知恵袋でのロリータ・ファッションに関する意見交換などがなされている。ただし、素性の知

らない沢山の人と交流することを望まず、一定の狭い範囲の友好関係のなかでSNSを連絡ツールとして使用している例も見られ、ロリータの受けとめ方の違いから、SNSとの関わり方にも差異が現れているようである。

2008年のサブプライムローン問題を端緒とする世界同時不況を迎えると、安くて手軽なファストファッションのブランドが支持されるようになり、誰もが容易に最新のファッションが入手できるようになると、流行の加速化に拍車がかかった。

不況の影響は、ブランドものの古着ショップやオークションサイトを活況にし、二次流通がさかんになるという契機を生んだ。こうして、高価で敷居が高く、手にしにくかったファッションを経験するハードルが下がったことも、ロリータ・ファッションの浸透に寄与したと考えられる。加えて、1990年代から広まったレイヤード・ファッションが2000年代半ばには最盛期をむかえ、ファストファッション・ブームと相まって、チープに見えない工夫として、古着と合わせたり、リメイクしたり、アクセサリーに凝るなどして、アイテム本来に備わるイメージや価値をずらして楽しむ着こなしも展開された。

かくして、ブランドの価値観にとらわれ、ファッションはお金がかかるものといった考え方に代わり、安くて、おしゃれ、そして何よりみんなで楽しめるファッションが享受されるようになった。その結果、流行の加速化は進展を続けていても、少しずつ異なる装いが同時多発的に現れるようになり、90年代のような、個人的でくっきりとした輪郭を持つファッションはストリートから確実に減少していくことになった。

ファストファッションにより、流行のアイテムが容易に入手できるようになり、インターネット上でそうした流行のファッションを浴びるように見ることができるようになった結果、流行に対し、食傷気味となり、ブランドや雑誌

が提案するトレンドに対しても、距離をとる傾向が見られるようになった。

そのような状況のなか、ロリータ・ファッションだけは、他の流行を追従せず、独自の装いを存続させていたため、90年代以上に際立った存在として、認識されるようになったと考えられる。2000年代の半ばの原宿を中心として、ロリータ・ファッションで全身をコーディネートさせた10代後半から20代前半くらいの女の子のグループが街歩きを楽しむ光景が多数見られるようになったのは、ロリータ・ファッションの、装いこそ甘いけれども、これまでのファッションとして考えられてきた流行の服を着るという行為を超えた、ひたむきな強さに惹かれたからではないかと推測される。

## 5-2. 細分化するロリータ

ロリータ・ファッションが一般に浸透するにつれ、より細分化が進んでいる。Ⅱ.のロリータ・ファッションとは何かで触れたように、「ゴシック&ロリータバイブル Vol.37」(2010)ではロリータ・ファッションについてロリータ・ファッション、ゴシックファッション、ゴシック&ロリータ・ファッションと3種類に大別している。

そのなかのロリータ・ファッションをさらに①スイート・ロリータ、②クラシカル・ロリータ、③デコラティブ・ロリータ、④ロリータ&パンクスとに小分類を設けており、それぞれの詳細は次の通りである（「ゴシック&ロリータバイブル Vol.37」(2010)では④ロリータ&パンクスをロリータ・スタイルに含んでいるが、ロリータ&パンクスはパンクテイストが中心で、外見的特徴も異なるため、本論のロリータ・ファッションには含まない。よって、ここでは詳しく触れない）。

①スイート・ロリータ：正統派ロリータとも呼ばれ、ワンピースやジャンパースカートにリボン付カチューシャやヘッドドレスを合わせたロリータ・スタイルの定番である。配色

は白や赤、ピンク、サックスといった色合いが多いが、ゴシックの要素を含まないスタイルリングであれば、黒色であってもスウィート・ロリータに含まれる。

- ②クラシカル・ロリータ：派手な色みを抑えて、茶の濃淡やスモーキーなピンクなどでまとめる。上品なお嬢様をイメージしたスタイルである。
- ③デコラティブ・ロリータ：スウィート・ロリータをベースに、お嬢様のお洋服をイメージしたフリルやレース、ヘッドドレスなど装飾を重ねたスタイル。ピンクやサックス、ラベンダー、ミントグリーンといったパステルカラーを用いたスタイルである。

2012年現在、ロリータ・ファッションに含まれるブランドには、「MILK」、「Vivienne Westwood」、「Jane Marple」、「Angelic Pretty」、「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」、「Metamorphose temps de fille」、「Innocent World」、「Emily Temple cute」、「Victorian maiden」などがある。もちろん、熱烈なブランド信奉のケースも少なくないが、ブランド側が着用者のイメージを固定するのではなく、自分のイメージするロリータ像に合わせたブランド選別が行なわれている。だからこそ、ロリータ・ファッションの分類は、より細分化の方向が進行したのであり、極論すれば、ロリータ・ファッションを好む人それぞれに差異があり、微細な点に注目すれば、すべて異なる分類に属されることになる。するともはや、分類することの意味も不確かなものになっているように感じられる。

なお、ここ数年はメイドカフェの流行と共に、ロリータ・ファッションとメイドが混同されることが多いが、ロリータ・ファッションを身に纏うロリータの多くはメイドと混同されることを嫌う。秋葉原などでみられるメイド喫茶のメイドはフリルやレースがたっぷりのエプロンやワンピースを着用しており、ロリータ・ファッションのアイテムと部分的な共通点はあ

るが、全く別物である。その理由は、ロリータ・ファッションはストリートファッションであり、メイドはコスチュームプレイの一種であるという違いを挙げることができる。多くのロリータはロリータ・ファッションを身に纏い、お茶をしたり、ショッピングをしたりとロリータ・ファッションの姿で日常生活を暮らしている。一方メイドは、元来の特定の屋敷内で給仕する使用人というルーツから、メイド服はメイドとして給仕する際のユニフォームとみなされる。メイドはメイド服姿で日常生活を暮らすことをしない。更にロリータは華やかなドレスを身にまとうお嬢様というイメージを持っている。ロリータは給仕を受ける立場であり、メイドは給仕をする立場であるから、両者は同一視できないのである。

### 5-3. 一般化するロリータ

2004年5月、嶽本野ばら原作の映画『下妻物語』が全国ロードショーをスタートし、ロリータ・ファッションの存在が急速に知られるようになる。この映画で衣装提供をした「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」は、映画の中でも実名で登場している。

「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」はドラマや舞台など様々な場面で衣装提供をしており、2011年に公演された宝塚歌劇団月組公演の『アリスの恋人』へも衣装協力をしている。

ロリータ・ファッションのブランドは、2000年代初頭は、ビジュアル系バンドへの衣装提供が盛んであったが、2000年代中頃より、アイドルへの衣装提供が盛んになる。「Angelic Pretty」は中川翔子やAKB48へ衣装提供をしている。アイドルへの衣装提供により、テレビや雑誌といったメディアに露出する頻度が増加し、ビジュアル系バンドとの関連が強かったアンダーグラウンドなイメージのファッションから、アイドルやポップ・カルチャーのイメージがミックスされるようになった。

メディアの露出に伴うイメージの変化と並行

して、ロリータ・ファッションブランドのデザインにも変化が見られる。例として、「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」の発表したアイテムを以下で検証する。

2000年代初頭はロココの世界をテーマにしたクラシカルなアイテムが中心であった。2001年発表のエリザベスワンピースは、赤色の生地の一ピースであり、白のレースがたっぷりとしらわれた四段ティアードスカート、フレアに広がる姫袖のデザインが特徴となっている。2004年発表のローヴ・ア・ラ・フランセーズは、ピンクの生地の一ピースで、ストマッカーのような胸元のデザインにはリボンがしらわれ、前スカートの台形の切替にはティアードの白いフリル、袖は姫袖のデザインが施されている。

2000年代初頭の傾向に対し、2000年代後半は物語のなかのお姫様をテーマとしたアイテムが中心となった。2006年発表のユキノナミダヒメワンピースは、巖本野ばらが創作したユキノナミダヒメの物語と、ロリータから人気を集めているブライズドールとのコラボレーションで生まれたワンピースである。三段ティアードスカートのパステルブルーの一ピースに、雪の結晶をプリントしたオーバースカートを重ねたデザインが特徴である。2012年発表の雪の女王～妖精が舞い降りる白い国～柄ワンピースは、雪の世界が表現されたイラストをオリジナルプリントにしたパステルカラーがベースのワンピースである。

こうしたブランドの変化と平行して、ストリートに登場するロリータ・ファッションにも変化が現れる。ここでは、「ゴシック&ロリータバイブル」に掲載のスナップを比較してみる。

2000年代初頭は、黒、白、ピンクの無地のアイテムが多く、プリントアイテムの柄もローズ柄やチェック、イチゴ柄などロリータ・ファッションにとって定番のアイテムが中心であった。姫袖のデザインやケープ付のデザインなどが好まれ、ロココのイメージがベースとなっている

ことが分かる。スタイリングは白のブラウスにスカートやジャンパースカート、白か黒のハイソックスを合わせた定番のコーディネートが多く、メイクはナチュラルメイクかアイラインを強く引いた少し不健康そうなメイクが目立つ。ヘアスタイルは黒髪か金髪が多く、あまりアレンジをせず、ストレートにおろしたヘアやツインテールに結ったヘアにカチューシャやヘッドドレス、ボンネットを飾るという特徴であった。スナップに写るロリータは基本的に無表情でゴシックな要素を感じる印象がある。

2000年代後半は、プリントのアイテムが中心となっている。パステルピンク、ミント、サックス、パステルパープルといったカラフルな生地をベースに、動物やスウィーツ、リボン、童話といった様々なテーマのイラストがプリントされている。スタイリングは白、黒、パステルカラーのブラウスと、レースアップ柄や花柄、スウィーツ柄などがデザインされたオーバーニーソックスをワンピースやスカートのデザインに合わせてコーディネートをしている。メイクは付けまつげを使い、ピンク色のチークを濃くのせたお人形のようなメイクが多く見られる。ヘアスタイルは金髪やピンク色のヘアウィッグを被ったり、髪をカールさせた‘盛る’ヘアスタイルをしたりと様々なアレンジをし、大きなリボンの付いたカチューシャやバレッタ、ミニハット、ヘッドドレスなどで装飾している。

前述したロリータのジャンルによって更にコーディネート方法に違いがあり、スタイリングの方法は2000年代初頭から大幅に増えている。スナップされるロリータの表情は笑顔で、2000年代初頭のようなゴシックな要素は感じられず、おとぎ話の世界からでてきたお姫様のような印象である。

2000年代後半は、ロリータのカジュアル化も盛んになる。普段着でも気軽に着ることができそうなスカートのボリュームを抑えたワンピースやスカート、サロベット、パーカーなど少しカジュアルなデザインが登場している。

「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」のデザイナー加納万須美は、「雑誌で見るコーディネートではなく店舗で自分のアイテムを見つけて欲しいです。日常から親しめるようになるきっかけになると嬉しいです」とコメントしており、「Angelic Pretty」のデザイナーasukaは「今後は〈日常的に着られる可愛いもの〉を提案していく予定です。カジュアルテイストの強い日常着でも、普通のお店では売っていないものを作って行こうと思います。コアなファン向けのこだわりのアイテムと平行して、もっとたくさんの人に着てもらえるような幅広い商品展開を考えています」とコメントしている。このように、ロリータ・ファッションブランドからも普段着としてのロリータ・ファッションを広める姿勢がみられた。

一方で2000年代初頭のスタイルを貫くコアなファンも多く存在している。ロリータ・ファッションブランドでは、人気のあったオリジナルプリントを何年かたった後に復刻させて販売している。「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」は2012年9月に代官山にあった本店を原宿に移転オープンしたが、その際の記念イベントとしてグログラン柄ジャンパースカート、Mary in the sky with the candies 柄ジャンパースカートなど、オリジナルプリントアイテム5型を復刻販売した。「Angelic Pretty」が2002年から発表している肩リボンジャンパースカートは、型を少しずつリメイクしながら何度も復刻しており、コアなファンであれば1着は持っているという定番アイテムとなっている。2012年には2007年発表のおもちゃ箱の世界をイラストで表現したオリジナルプリント TOY PARADE 柄アイテムを復刻販売した。

クラシカル・ロリータのスタイルは2000年代初頭のロリータ・ファッションのスタイルを引き継いでいる傾向がある。黒、白、ネイビーなどの落ち着いたカラーの無地のアイテムが多く、プリントアイテムの柄もローズ柄やチェック柄が中心である。メイクやヘアアレンジはお

人形のようなイメージであるが、ロココの世界を感じるデザインや、落ち着いた配色のスタイリングは2000年代初頭のロリータ・ファッションのスタイルを引き継いでいるといえるだろう。こうした動きは、トレンドに振り回されてきて、過去のスタイルを振り返らない行為に慣れ親しんだ若者の目に新鮮に映ったに違いない。

## VI. まとめ

本論では、ロリータ・ファッションがいつどのような形で登場し、現在までにどのように変容しているのかを整理した。この結果、ロマンティック・ファッションはロリータ・ファッションと共通する点が多いこと、ロリータ・ファッションのデザイナーがロマンティック・ファッションデザイナーの意匠を引き継いでいるということから、1980年代に萌芽があるといわれるロリータ・ファッションは、そのルーツがロマンティック・ファッションにあることを裏付けることができた。では、なぜロリータ・ファッションは、登場したのだろうか。

「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」の磯部明徳は、ブランド設立当初の1990年代初頭、バブル経済がはじけて「平成ブランド」というフレンチカジュアルをベースとしたブランドが人気を集め、「もう可愛い服は売れない、辞めた方がいい」と周囲からいわれたときの心境について次のように述べている。

僕はそのとき、「それなら、1つぐらいは可愛い服を作るブランドが残っていいんじゃないか。うちはこのまま続けていこう」って思ったんですよ。だから、BABYの存在意義っていうのは、流行に流されることなく、あえてそこでロリータ服を作り続けたことにあると思います。小さなロリータの灯火を消さなかったことが、BABYが今に至る理由だと思います。

‘乙女のカリスマ’ とロリータから人気を集

める嶽本野ばらは、ロリータの条件について次のように述べる。

ロリータって流派があって、皆それぞれの価値観でやってるので、「これだからロリータ」というのはないんですよ。…ロリータは耽美主義なんですよ。“耽美”という言い方がピンとこないなら、“耽かわいい主義”、かわいいものに命がけであることですね。

こうして、クリエイターたちが「かわいい」を突き詰め、それを支持するロリータ・ファッションを求める層たちが追い求めた1つの到達点がロリータ・ファッションにあったのだろう。

その裏付けとして、ロリータ・ファッションは流行に左右されないある種の普遍性を持ち合わせている。「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」や「Angelic Pretty」では人気のあったオリジナルプリントを何年かたった後に復刻させて販売をしており、中古品を扱うブランド古着店では、数年ほど前のデザインのアイテムであっても、人気のあるデザインのアイテムは当時の売値より高値で流通している。

ロリータ・ファッションを作るクリエイターと、ロリータ・ファッションを身に纏うロリータが、かわいいものに対して真摯に向き合ったからこそ、現在のロリータ・ファッションが存在しているのであろう。これは、トレンド＝ファッションと考えられてきた、これまでのファッションに対するオルタナティブな動きであり、次のファッションのあり方に大きなヒントを与えてくれる装いなのではないかと考えられる。

本論ではロリータ・ファッションのルーツと現在までの変容について整理をした。今後は、2000年代のロリータの変遷と関連しているカルチャーについてより詳細に検討したい。

本研究は科研費(若手研究(B)23700874)の助成を受けたものである。

## 参考文献

- アクロス編集室編『STREET FASHION 1945-1995』, パルコ出版 (1995)
- 『流行観測95-96』, パルコ出版 (1995)
- 『ゴシック&ロリータバイブル Vol.2』, ヌーベルグー (2001)
- 『ゴシック&ロリータバイブル Vol.3』, ヌーベルグー (2002)
- 『ゴシック&ロリータバイブル Vol.4』, ヌーベルグー (2002)
- 『ゴシック&ロリータバイブル Vol.5』, ヌーベルグー (2002)
- 『ゴシック&ロリータバイブル Vol.37』, インデックス・コミュニケーションズ (2010)
- 『ゴシック&ロリータバイブル Vol.39』, インデックス・コミュニケーションズ (2011)
- 『ゴシック&ロリータアンサンブル Vol.1』, インフォレスト (2010)
- 原ミユキ「青木美沙子 ロリータモデル・看護師 ロリータ・ファッションを理解してもらい世界に広めるために先頭に立って歩いていきたい」月刊日本語, No.24, 4-7 (2011)
- JAFCA「流行色 No.552」, 日本ファッション協会流行色情報センター (2008)
- 「流行色 No.553」, 日本ファッション協会流行色情報センター (2008)
- 「流行色 No.560」, 日本ファッション協会流行色情報センター (2010)
- 「Tokyo New Tribe CD版 Vol.1」, 日本ファッション協会 流行色情報センター (2011)
- 城一夫著『ファッション年鑑 1987』, エフ・ディー・アール (1987)
- 城一夫・渡辺直樹著『日本のファッション』, 青幻社 (2007)
- 金子功著『金子功のプリント絵本』, 文化出版局 (1987)
- 加藤訓仁子「世代別「ロリータ・ファッション」考察」繊維学会誌, No.66, 219-222



- (2010)
- 【KEROUAC Vol.2】、バウハウス (1998)
- まえがわまさな「台湾におけるゴシック、ロリータ、ゴシック & ロリータ文化初探—現代文化の受容と変化」、人間学研究 No. 7, 67-75 (2008)
- 「ゴスロリはどこにいる現代文化流行の虚像と実像・台湾との比較を通して」、人間学研究 No.8, 45-52 (2009)
- 松浦桃著「セカイと私とロリータ・ファッション」、青弓社 (2007)
- 松谷創一郎著「ギャルと不思議ちゃん論 女の子たちの三十年戦争」、原書房 (2012年)
- 水野麗「かの子ロリィタ」、國文學 No.52, 69-77 (2007)
- 「「女の子らしさ」と「かわいい」の逸脱—「ゴシック・ロリィタ」におけるジェンダー」、女性学年報, No.25, 107-135 (2004)
- 西村則昭「「ゴシック」な世界観と「乙女」のアイデンティティ—あるストリート・ファッションをめぐる魂の現象学の試み—」、仁愛大学研究紀要, No.3, 23-37 (2005)
- 荻野安奈「2005年度藝文学会シンポジウム—人造美女は可能か?」芸文研究 No.90, 96-58 (2006)
- 【Olive No.29 (1983年9月号)】、平凡出版 (1983)
- 【Olive No.30 (1983年9月号)】、平凡出版 (1983)
- 【Olive No.31 (1983年10月号)】、平凡出版 (1983)
- 【Olive No.60 (1985年1月号)】、マガジンハウス (1985)
- 【Olive No.62 (1985年2月号)】、マガジンハウス (1985)
- 【Olive No.83 (1986年1月号)】、マガジンハウス (1986)
- 【Olive No.84 (1986年2月号)】、マガジンハウス (1986)
- 【Olive No.90 (1986年5月号)】、マガジンハウス (1986)
- 【Olive No.108 (1987年2月号)】、マガジンハウス (1987)
- 【Olive No.111 (1987年4月号)】、マガジンハウス (1987)
- 芝崎こと恵「「ゴシック & ロリータのアイコン」としての嶽本野ばら」、白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集, No.12, 135-152 (2009)
- 【装苑 (1984年3月号)】、文化出版局 (1984)
- 【装苑 (1984年7月号)】、文化出版局 (1984)
- 【装苑 (1984年12月号)】、文化出版局 (1984)
- 嶽本野ばら著【ミシン】、小学館 (2000)
- 【鱗姫】、小学館 (2001)
- 【ツインズ 続・世界の終わりという名の雑貨店】、小学館 (2001)
- 【エミリー】、集英社 (2002)
- 【下妻物語 ヤンキーちゃんとロリータちゃん】、小学館 (2002)
- 【ロリキタ.】、新潮社 (2004)
- 徳山孝子「ロリータ・ファッションに見る近未来消費科学の行方」、繊維製品消費科学 No.51, 616-620 (2010)
- 渡辺明日香著【ストリートファッション論】、産業能率大学出版部 (2011)
- 横浜美術館編【ゴス】、三元社 (2007)

共立女子短期大学生活科学科紀要 第56号 (2013)

表 ロマンティック・ファッションブランドとロリータ・ファッションブランド年表

	ロマンティック・ファッション ブランド	ロリータ・ファッション ブランド	関連事項
1970年	大川ひとみによる「MILK」設立		
1971年		「Vivienne Westwood」活動開始	
1973年	金子功による「PINK HOUSE」設立		
1974年		「MILK」から独立した柳川れいによる「Shirley Temple」設立	
1975年		「MILK」から独立した村野めぐみによる「Jane Marple」設立	
1977年	「VIVA YOU」設立		
1978年	「エスト」(現「レスト・ローズ」)設立		ラフォーレ原宿オープン
1979年		ラフォーレ原宿にセレクトショップ「Pretty」(後の「Angelic Pretty」)がオープン	
1980年	「SUGAR」(現「ストロベリーフィールズ」)設立		
1982年			『Olive』(マガジンハウス)創刊
1983年	「田園詩」が雑誌『Olive』に広告掲載 大西厚樹による「ATSUKI ONISHI」設立		オリブ少女登場 ナゴムレコード設立
1984年	中野裕彦による「HIROMICHI NAKANO」設立		
1985年			『STREET』(ストリート編集室)創刊
1986年	「田園詩」が原宿にショップをオープン		1986年～1991年頃 バンドブーム
1988年		「ATSUKI ONISHI」から独立した磯部明徳による「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」の前進となる婦人服製造卸会社を設立	
1989年		「Jane Marple」原宿に直営店オープン	『CUTiE』(宝島社)創刊
1992年		磯部明徳による「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」ブランド設立	MALICE MIZER結成 ALI PROJECTデビュー
1993年		加藤則仁子による「メタモルフオーゼ」(後の「Metamorphose temps de fille」)設立	『Zipper』(祥伝社)創刊
1996年			『FRUITS』(ストリート編集室)創刊
1997年		藤原ゆみによる「Innocent World」設立	
1998年			『KEROUAC』(後の『KERA!』)創刊 ロリータ・ファッションのスナップ採用
1999年		「Shirley Temple」からティーン向けのブランド「Emily Temple cute」発足 MALICE MIZERのManaが「Moi-meme-Moitie」をプロデュース 「Victorian maiden」設立	
2000年			417号をもって『Olive』休刊 『ゴシック&ロリータバイブル』創刊 楳本野ばら小説家デビュー
2002年			ラフォーレ原宿での「Gothic&Loita万博」開催
2004年			映画『下妻物語』公開
2007年		「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」フランス・パリ店オープン	「JAPAN EXPO」にロリータ・ブランド参加
2009年		「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」アメリカ・サンフランシスコ店オープン	「ポップカルチャー発信使」任命
2010年		「Angelic Pretty」フランス・パリに直営店オープン	
2011年			上田安子服飾専門学校「ゴシック&ロリータファッション専攻」新設
2012年			イギリス・V&A博物館にて「ロリータファッションと英国の影射」展開催

ロリータ・ファッションのルーツ



図1 1980年3月原宿ロマン  
ティック・スタイル



図2 1985年12月原宿ロマン  
ティック・スタイル



図3 『Olive No.108 (1987年2月号)』, p.66. 67 (1987)



図4 『Olive No.83 (1986年1月号)』, p.10. 11 (1986)



図5 『KEROUAC Vol.2』, p. 4, 5 (1998)



図6 『KEROUAC Vol.2』, p. 78, 79 (1998)



図7 1999年3月原宿ロリータ・スタイル



図8 1998年6月原宿ロリータ・スタイル

ロリータ・ファッションのルーツ



図9 『ゴシック&ロリータバイブル Vol.5』 p. 22, 23 (2002)



図10 『ゴシック&ロリータアンサンプル Vol.1』 p. 50, 51 (2010)



図11 2005年10月原宿ロリータ・スタイル



図12 2011年4月原宿ロリータ・スタイル